

〔大隈祭〕における講演活動〕

参議大隈重信の情報網

——『大隈侯昔日譚』を手がかりに——

大日方 純 夫

はじめに

「大隈祭」に参加させていただくのは九回目となります。ここでお話するのも三度目です。第一回目の二〇一二年には、大隈さんが政府を追い出された経過をお話ししました。政府のトップにいたのに、一転して野に下らざるをえなくなった「明治十四年の政変」についてです。三年前の二回目、二〇一六年は、ちょうど岩波文庫で早稲田大学編『大隈重信演説談話集』を出版した後でしたから、これを素材に、大隈さんが何を語ったのかをお話ししました。三回目の今日は、「新政府のなかの大隈重信」に焦点を当ててお話ししたいと思います。

一昨年、大隈祭で話をした真辺将之さんは、著書『大隈重信』（中央公論新社、二〇一七年）のなかで、明治初年の大隈さんについて、「後年の、政治的見解を問わず大勢の客人を自邸に迎え入れた大隈の姿勢とはかなり異なっている」

と指摘しています。「外交ついで財政の舞台で活躍して頭角を現し、近代化政策に邁進」した切れ者が大隈さんで、ばりばり政策を進めていたというのです。真辺さんの本で紹介されているのですが、木戸孝允は、大隈の才気は、義弘・村正の名劍のごとし、つまり鋭い切れ味だ、シャープだと言っています。また、三条実美も、大隈・伊藤の二人は非常に優秀で、得難い人物であり、頼もしいが、英敏のあまり、「人を籠絡し権謀術数に近く、温和の気象包容の度量」がない、と書いています。そこで、この切れ者の大隈さんが、参議時代の一八七〇年（明治三年）から、政府を追われるまでの約一〇年間に、どのように情報を集めていたかを探ってみたいと思います。

佐々木隆さんは、『伊藤博文の情報戦略』（中公新書、一九九九年）のなかで、「政治家はどのような方法で情報を収集し、伝達するのであるか。彼らはまた、どのように情報を分析・評価し、行動に移すのであるか。そもそも情報は彼らの行動にとつてどの程度、役に立っているのだろうか。単純で常識的な問題だが、正面切つて尋ねられると意外に答えにくい設問である。事実、日本近代史の分野で、こうした研究はほとんど存在しない」と指摘しています。佐々木さんは、伊藤博文について書いているのですが、私は明治初期の大隈さんに即して、これを解明してみたいと思います。

I 『大隈重信自叙伝』と「監部設置」・「浪人探偵」

さて、『大隈重信演説談話集』はできましたが、岩波書店との約束があり、もう一冊、大隈さんの自叙伝を作るこれが課題となっていました。これは、昨年（二〇一八年）三月、『大隈重信自叙伝』として、同じ岩波文庫で刊行されました。これによって大隈さんの文庫本二冊がセットとなったわけです。佐賀の方には『自叙伝』がお勧めです。生

い立ちからの佐賀時代が大きな比重を占めているからです。

大隈さんは後ろをあまり振り返りながらいない人です。昔のことは余りしゃべらないし、書かない。そうしたなかで、日清戦争の頃に大隈さんにヒアリングして、それをまとめた『大隈伯昔日譚』という本があります。これは、聞き手が大隈さんの話をもとに文章を作って文語体で書いているものですから、読んでみると大隈さんらしくない語り口です。非常に詳しく書いていますが、明治初期の「征韓論政変」までで、その後は語っていない。

一方、大隈さんは一九二二年（大正十一年）一月に亡くなりますが、その前年夏、「征韓論政変」以後についても話していて、『報知新聞』に連載されました。しかし、大隈さんが病気になったため途中で中止され、聞き取りの内容は「明治十四年の政変」後あたりまでとなってしまうました。そして、亡くなってしまったため、「その後」は語れないままとなりました。最晩年の昔語りです。

この新聞連載は、大隈さんが亡くなったすぐ後、聞き手の松枝保二の編で、『大隈侯昔日譚』という本にまとめられ、報知新聞社出版部から刊行されました。そこで、「征韓論政変」までの『大隈伯昔日譚』と、この『大隈侯昔日譚』をつなげて、「自叙伝」を作ろうと考えたのです。しかし、「明治十四年の政変」で政府を追われた後は、余りない。やむを得ないので、大隈さんの談話などから選び出して、「その後」を編集しました。

こうして、岩波文庫の『大隈重信自叙伝』が出来上がったわけですが、分量の制約のため、もとの二つの『昔日譚』からかなり割愛した部分があります。とくに『大隈侯昔日譚』は、かなり割愛しています。自叙伝にふさわしいところは入れましたが、「昔日譚」ということで、昔のことをいろいろ思い出して話していますから、「自叙伝」に合致しないところは落としています。「一 開化政策の推進と明治十四年の政変」のところでは、原本にある「演劇、能楽一夕話」、「音楽、美術門外話」、「我国最初の製糸工場」、「明治維新と宗教上の変革」、「学術の進歩と教育の普及」、「人

才登用と各藩の門閥」、「豪傑揃ひの築地梁山泊」、「藩閥の合縦連衡と人物分布」、「法制統一と官僚政治」、「藩閥勢力の漸次衰退」、「監部設置と浪人探偵」は、収録していません。

さて、この落とした部分の中に「監部設置と浪人探偵」があります。大隈さんの晩年の語りということで、いい加減な内容かというところ、実はそんなことはなく、これからお話ししますように、調べてみたら正確であることがよく分かりました。つまり、思いつきでしゃべったのではなく、正確で、かつ大隈さんの話がなければ、闇に消えてしまいかねない事実があったのです。そこで、今日はこれに絞ってお話ししてみることになります。

Ⅱ 大隈重信と政府情報機関（監部）

（Ⅰ）監部の設置

大隈さんは、松枝保二編『大隈侯昔日譚』の回想談のなかで、弾正台は廃止されたが、人心の動揺はますますはなはだしく、陰謀や暗殺があちこちにあるので、その後、新たに監部というものをおいたと語っています。弾正台というのは、新政府草創の時期に創られた監察機関というか、偵察機関です。評判が悪くて廃止されたのですが、しかし、武士が潰れて失職し、「不平家」がたくさんいる。煽動家もあり、人心がはなはだ安定を欠いて、非常に危険な状態だった。表面上、地方官もあり、警察のようなものもあったが、それだけでは不十分なので、別に「監部」をおいて人心の動きを察しようとしたと、大隈さんは語っています。その役目は、「刑事」とか「密行」とかいうもので、表面の官吏としたのではまずいから、極めて隠密に仕事をさせたというのです。

さて、この監部について、大隈さんは、その時の相談で、「我輩」がその長官ということになったが、そういうこ

とは「頗る不得手」なので、当時、自分のところに入入りしていた「浪人や豪傑連中やら」を用いることにしたと語っています。

しかし、大隈さんが長官であったという点について、現在、裏付けは何もありません。長官といっても、正式なポストには、どうもなっていない。参議ということ、内輪の相談で担当者になったようです。ただし、この監部そのものは、大隈さんの単なる回想ではなく、正式の政府機関だったことが確認できます。

監部の設置に関して、伊藤博文は一八七一年、諸官員を監督するのは、参議および行政各部の長官の任務なので、参議は「密使」を使って四方の状況や官員の「正非」を「偵知」すべきだと主張しています。つまり、政府トップの政治家は、各地方の様子や役人の状況を密偵に探らせ、その実態を把握すべきだということです。というのも、新政府草創の時期、地方の役人は新政府のもとにありましたが、ちゃんと政府の方針通りに仕事をしているかどうか分からない。つまり、地方の役人が一体何をやっているのか、表向きの情報だけでは信用できないということで、裏からいろいろな情報を集める必要があったのです。こうして、各地に江戸時代で言えば、隠密とか、御庭番とか、こうした人物を派遣すべきだということです。

木戸孝允も、やはり同じ年、参議は各省・各官の実状・実況を詳細に知らなければ、政策執行に障害を生じるとして、各地に「隠密の細作」、「細作」とは密偵のことですが、これを派遣して探索にあたらせるべきだと主張しています。そして、関係者以外、このことは秘密にし、もちろん「隠密の探撃書」は参議以外の人に見せてはならないと述べています。

こうして、一八七一年（明治四年）七月、太政官正院という政府の中枢機関のもとに、「監部」が設置されました。

「監部課事務章程」は監部について、「正院耳目ノ官」であり、「諸官省各局各地方官員奉職ノ怠惰処務ノ奸詐ヲ行走

探索スルノ職」であると規定しています。つまり、情報収集するための専門機関です。「監部ノ行走探索」は、すべて「三職」の命令に従って派出することになっています。三職とは大臣や参議のことです。政府トップの政治家は、この監部を使って情報収集活動を展開するのです。

一八七一年七月に定められた「監部心得」があります。監部は「三職ノ耳目」、つまり耳や目だとして、監部の官員は、諸官省および各地方官員の「奉職処務上ノ作悪」を探索することに注意を要すると規定しています。また、自ら「官人」と称したり、「御用」に付き「某事」をなすなどと「自称」することは、「勿論嚴禁」だとしています。さらに、「御用ノ事」は、親子兄弟たりとも漏らすことは「一切嚴禁」だとしています。こうして、中央諸官庁の役人や、各地方の役人の状況を秘密裡に探索するために、監部が設置されたのです。

(2) 監部のスタッフ

では、誰が監部か。実は、『官員録』などを見ても、誰が監部なのか、機密性が高いポストだからでしょうか、記載がなくてよく分からないのです。しかし、幸いなことに、「監部諸証書類」とか、「監部諸証録」という資料が、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されています。古書店で購入したらしく、来歴はよく分からないのですが、この書類に、誰々にいくら渡したとか、どこにどこに派遣したとかが記載されています。それを洗い出してみると、一部ではありますが、監部関係者の顔ぶれが浮かび上がってきます。しかも、これには、監部の正式スタッフだけでなく、諜者、異宗徒掛諜者、臨時雇諜者、偵員という、探索にあたった諜者・密偵に関する記載があります。この書類から、各年・月ごとの人数を集計したものが別表です。この表にあるようなスタッフを抱えて、各地の情報収集をしていたことが明らかになります。これは公式の資料ですから、間違いのないことができます。ただし、この書類からわ

【別表】 諜者数の推移（「監部諸証録」による）

1874年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
諜者	14	10	13	12	10	10	14	16	15	14	15	15
異宗徒掛諜者	14	14	14	7	7	7						
臨時雇諜者	9	11	6	8	10	13	13	13	12	10	9	
偵員	10		10	10	10	10	11	11	11	11	11	11
1875年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
諜者	18	17	19	19	19	17	16	16	15	19	17	18
臨時雇諜者	10	8	9	10	9	9	10	14	14	10	10	10
偵員	11	10	10	10	10	10	10	10	10	9	11	11
1876年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
諜者	19	17	16									
当分諜者	10	11	10									
偵員	11	11	11	16	12	7	10	10	10	7	7	9
1877年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
—	7		7		5	5	4	4	4	3	4	4

かるのは一八七四年以降です。監部が設置されたのは一八七一年七月ですから、活動を本格的に展開していたに違いのない肝心な時期の状況は、残念ながらわかりません。

さて、この表のなかでとくに興味深いのは、異宗徒掛諜者です。新政府は草創の時期、キリスト教を禁止していました。ですから、キリスト教は認めないということで、キリスト教関係の情報を収集しようとしていました。異宗徒掛諜者がこれを担当し、各地で宣教師などのもとに潜入していました。後で触れるように、大隈さんが亡くなった後、早稲田大学に寄贈された文書のなかに、異宗徒掛諜者の人名と配置を記載した資料が入っています。それを見ると、長崎、大阪、東京、横浜、函館といったキリスト教の布教活動の拠点に配置されていたことがわかります。

しかし、一八七三年（明治六年）にキリスト教の布教・信仰は黙認されることになり、取締り体制には終止符が打たれます。その結果、異宗徒掛諜者は、別表のように、一八七四年、一四人から七人に半減し、さらに六月までで一切消えています。

その後、監部の探索活動の中心は、地方行政の探索となります。一八七四年二月の「監部課員派出心得」では、「時態人情ノ変遷ヲ速知」することを職務とし、①各府県治の状況、②官員の勤務状況（長官・次官の和・不和の状況）、③人情の向背、苦情の有無、④貫属士族の方向、生計の状況、⑤忠孝節義奇特者、⑥鰥寡孤独廢疾者、⑦学校、⑧徴兵、⑨道路・橋梁・堤防の修理、⑩開墾・物産・諸会社、などについて探索することになっています。

Ⅲ 大隈重信の情報人脈と探索活動

(1) 大隈重信と五代友厚・北畠治房

では、一体、誰が、どのようにして大隈さんにつながってきたのでしょうか。大隈さんの情報人脈ということでは、今回お話しするためにあれこれ調べていて、「え？」と意外なことに気づきました。以前、この大隈祭で「明治十四年の政変」についてお話ししましたが、その時、政変の直接のきっかけとなった開拓使官有物払下げ事件について、薩摩出身の政商五代友厚と政府の薩摩系の癒着を大隈さんが批判したことも要因となつて、大隈さんが政府を追われたという流れでお話ししました。ですから、五代と大隈は仲が悪かったと錯覚しかねないのですが、とんでもない。二人は非常に親密で仲が良かった。資料を見ると、二人が情報交換しあっていることがはっきりしてきます。

『大隈侯昔日譚』で大隈さんは、「我輩にはドウしても此役目だけは出来ぬ。我輩はこんなことは余り好でもないが、不得手でもある。どちらかと云へば陽気な方で、探偵等と云ふ陰險な仕事は出来ぬ」と語っています。では、どうしたのか。「北畠を以て其親分にした」ということで、実際には北畠治房が大隈さんのもとで「探偵」の元締めをしていたようです。そして、この北畠を大隈さんに最初に紹介したのが、五代友厚だったというのです。

五代が大隈さんに北畠を紹介した証拠があるのかどうか探してみたところ、大学史資料センターが編集した『大隈重信関係文書』のなかに、五代からの大隈宛の手紙がありました。一八七一年（明治四年）八月二三日付の手紙です。五代は、「北畠四郎と申す仁は、以前からの知り合い」で、近年はだいぶ開けてきて、「開化人物に属す」と書いています。そして、「愉快なる人物」なので、現在、さまざまな人物を採用しようという折から、北畠に会ってほしいと願っています。北畠は四方に交わりが広く、使うと必ず役に立つと紹介して、彼を使ってほしいと伝えているのです。

その後、同年一月一二日付の手紙でも、五代は大隈さんに、北畠に会って京都・大阪方面の状況を直接に聞いてほしいと要請し、さらに、同人はどのようなことを託しても大丈夫なので、使ってやってほしいと申し入れています。では、そもそも薩摩の五代友厚と大隈さんが、なぜ知り合いなのか、仲が良いのかということ。『五代友厚伝』（宮本又次、有斐閣、一九八二年）を参照してみますと、「五代は長崎において（中略）佐賀の大隈八太郎（重信）とも交際を重ねていた」と書いてあります。つまり、幕末の時期、五代は長崎に出て、各藩の志士と交わりをもっていた。大隈さんも長崎に行っていたので、そこで交流があったというわけです。

つぎに五代と北畠の関係ですが、『五代友厚伝』は、長崎に潜伏中、五代は何度か攘夷派のために暗殺の危機にさらされたと書いています。五代は訪ねてくる攘夷派の人々と激論したが、それらの人々も、五代の情熱に動かされて、結局、開国論者に転向したとして、北畠の名をあげています。すなわち、「天誅組に組みして、（中略）薩摩に亡命していた北畠治房も、五代に会って説服され、開国論者にかわっている」というのです。また、『五代友厚伝』は、「五代は部下・輩下に優秀な密偵を持っていて、その集めた情報を政府と交換していた」とか、「五代は中央権力に多くの親交ある人物を持ち、また腹心のものを入れていた。司法官北畠治房からの書翰は政府部内の動静、消息をよく伝

えている」と書いています。

こうして、五代友厚、北畠治房、そして大隈さんの人的なつながりが浮き彫りになってきました。では、北畠人脈にはどういう人物がいるのでしょうか。大隈さんは、『大隈侯昔日譚』のなかで、つぎのように回想しています。

北畠の乾兒には大分面白い人が居った。昔の勤王家連中で、例へば千秋と云ふ神主で、尾州一宮の宮司になつた、これが妙な男であつた。筑後柳川の人で後画家になつたが、却々勝れた歴史画を書いて居た。十年程前まで生きて居たのである。河辺とか何とか云つた三河の国の豪家らしいのも居た。其他国学者だとか神主だとか云ふ乾兒共が方々に沢山居た。(中略) 監部には我輩の部下も三十人程居たが、実に奇々怪々の人達ばかりであつた。先づこれで大凡国々にどう云ふ不穩の団体があるか、どう云ふ不平分子が居るか、大概解つた。

北畠の自分には、だいぶおもしろい人物がいた。勤皇家連中で、例えば「ちあき」と読むか「せんしゅう」と読むか分かりませんが、これは神主ということで、尾州・尾張の一宮の宮司になつたというのです。その他に、国学者、神主、いろいろな分子が北畠の配下にはいたと語っています。監部には自分の部下も三〇人ぐらいおり、これによってどういう不穩の団体があるか、どういう不平分子がいるかが大体分かつたというのです。

大隈さんが、このような情報収集網を使いながら、明治初年の各地方の状況を調査していたらしいことがええます。この点を確認するため、『大隈重信関係文書』を探してみますと、一八七二年(明治五年)三月三日付の大隈さん宛の北畠の手紙があり、これには「別紙又々大伴千秋よりさし越文中何も珍変無之候へども」と書かれています。大伴からの情報が北畠に来て、それが大隈さんに渡るといふ流れが見えるわけです。また、三月一五日付の北畠の手紙では、「千秋」が静岡あたりにいることが大隈さんに伝えられ、別紙として北畠宛ての大伴の手紙が送られています。

こうして、さまざまな形で情報が収集されていたようです。その情報ルートの一つが、大伴↓北畠↓大隈という流れだったと考えられます。

(2) 「大隈文書」のなかの探索報告書

大隈さんは、「我輩」が監部の「長官」ということになったと語っています。しかし、以上お話ししてきたのは、大隈さん自身の回想と、大隈さん宛の手紙にもとづくものです。ですから、「長官」ということになったという証拠が必要ですね。つまり、密偵の報告書がないと、手紙だけでは分からない。また、回想では証拠がつかめない。そこで、大隈さんが亡くなった後、遺族から早稲田大学に寄贈された膨大な資料、現在、中央図書館に所蔵されている「大隈文書」を見てみると、密偵の報告書がかなり含まれているのです。大隈さんが監部の元締めのような位置にあったことを裏付けるものです。

実は、キリスト教史関係では、「大隈文書」のなかの探索報告書を使った研究が、かねてからかなりあります。「大隈文書」の目録では、ただ一項目、「耶蘇教課者各地探索報告書（明治4・12〜6・4）課者豊田道二等」とあるだけです。実際には二三冊もあり、いろいろな探索報告書が入っています。

それを見てみると、各地に潜入した密偵（異宗徒掛課者）が監部に送った報告が、大隈さんのもとに集まっていたことがわかります。そのルートは、課者↓監部（担当は小池詳敬と小栗憲二）↓大隈、という流れだったようです。

例えば、横浜に入り込んだ課者としては、正木讓と安藤劉太郎の探索報告書が入っています。宣教師のもとに潜入した異宗徒掛の密偵は、洗礼を受けて「クリスチャン」になっています。キリスト教史の側では、彼らは日本で最初のプロテスタント「信者」として記録されています。非常に不思議な現象です。潜入しているのは誰か。実は浄土

真宗の僧侶だったのです。浄土真宗の僧侶が、異宗徒掛諜者として政府に抱えられ、キリスト教の教会に潜入して、聖書を読んだり、さまざまな教えを受けながら、洗礼まで受けて「クリスチャン」になったというわけです。

私はそのなかの一人、安藤劉太郎をずっと追跡していて、出身地の愛知県一色町の安休寺というお寺にも行ってきました。また、後でも触れますが、彼は諜者を辞めてからイギリスに行き、向こうで勉強しています。それがどこかよく分からないのですが、以前、私もイギリスに行った時、調べてみました。

明治初期、浄土真宗はキリスト教に対する対抗運動を展開しています。安藤劉太郎も本願寺から派遣されて長崎に行き、そこでキリスト教排撃の活動を始めます。やがて大阪に移って洋学校に入り、宣教師のもとに潜入します。ですから、浄土真宗の仏教徒でありながら、キリスト教に接近して潜入し、情報収集をしていたのです。その後、横浜に移りましたが、この横浜でのキリスト教の内情探索報告書が、「大隈文書」に含まれているものです。安藤劉太郎という名で、「クリスチャン」になります。おもしろいのは、同時に潜入していた他の密偵が、その様子を報告しているのです。「誰々が洗礼を受けた」と、他の密偵が報告しているわけです。しかも、密偵の報告書が非常に興味をひくのは、おたおたしていると、大変なことになると、危機感を伝えている点です。キリスト教は一生懸命にやっている、教育や慈善事業をやったりして、布教活動を展開している、われわれもすっかりしないと、まずい、というわけです。

ただし、政府がキリスト教を禁止してるからこそ、彼らの役目があるわけです。政府が認めてしまえば、お払い箱になってしまいます。したがって、先ほど触れましたように、キリスト教関係の密偵は、政府がキリスト教容認に転じたことよって、お役御免になったのです。その後、彼らがどうなったのかは、よく分かりません。安藤劉太郎だけは分かれますので、後でちょっと触れます。

さて、他方で、密偵たちは各地方でも探索活動を展開しています。各地に様々な不平や不満が渦巻いているわけです。政府は密偵を派遣してこれを探っていました。では、どのようにして調査するのでしょうか。調査対象に接近するためには、かなりの知識と人脈が必要です。外から観察しても内情は分かりませんから、相応のインテリ、相応に事情の分かる人物が入り込んでいく必要があります。

廃藩置県後の地方探索ということで、探索書をリストアップしてみました。「大隈文書」に入っているものですが、もちろん、「大隈文書」以外に他の政府高官、三条実美などその他の人物の関係文書のなかにも報告書はあります。大隈さんのもとにあった報告書では、莊村省三と大伴千秋の名が目立ちます。大伴については、先ほど触れました。

莊村省三は親密な情報係として大隈さんに抱えられていたようです。ただし、先ほど触れた五代・北畠とは別の人脈だろうと考えられます。莊村省三とは一体誰なのか、私はかなり以前から追究してきました。熊本出身で、横井小楠門下のインテリのようなのです。江戸でも勉強し、やがて藩の命令を受けて長崎に出張しています。一八六三年のことです。そこでフルベッキを知り、聖書などを読み、教えを受けたということで、長崎滞在中に洗礼を受けました。かなり早い時期のクリスチャンであるわけです。その長崎時代に大隈さんなどとも知り合ったということが、莊村の記録を調べた人によって明らかにされています。莊村は坂本龍馬、桂小五郎、それから副島種臣などとも知り合いになったといえます。そして、その後、一八七〇年（明治三年）二月に上京して、新政府の下で太政官の役人になったようです。

実際のところはよく分からないのですが、後藤新平の履歴書を見ると、東北から東京に出てきた後藤新平は、「熊本藩士莊村省三ニ随テ漢字ヲ修メ」たということです。莊村のところに住み込み、勉強し始めたというわけです。後藤新平の伝記を見ますと、莊村は「大隈重信等とも往来していたが、博覧強記、能弁」だと記されています。

こうして、おそらく幕末・長崎時代あたりからの人脈として、莊村は中央政府のもとで大隈さんと連携するところがあつたのではないかと推測されます。

さて、佐賀の乱の前後の地方探索でも、「大隈文書」では、やはり大伴千秋と莊村省三の名が目につきます。莊村については、西日本方面に入り込んでるようです。大伴は三河方面、あるいは東北方面に行っていることが報告書から分かります。

こうして大隈さんの回想録、各種の手紙、そして報告書そのものの裏付けからみて、大隈さんの情報網は、監部を中心とするものだったとみて、おそらく間違いないだろうと思います。

IV 監部廃止とその後

(1) 監部廃止と密偵

では、このような大隈さんの情報網はいつまで続いたのでしょうか。これについて、大隈さんは『大隈侯昔日譚』でつぎのように回想しています。

兎に角、斯かの如くにして監部を設けたが、自己の意思で他人を探偵し他人の陰微かげを摘とき、自己の悪む者は其善事までをも抹殺するは危険にして大害ありと見たから、三条、岩倉にも相談して単に人心の動きを見るに止めた。聊なほか其弊害も防ぐし、前述の如くに人心の動きを概括的に洞察するには徒勞ではなかつたが、それでも却々なほ難かしいので、明治九年頃い、加減に切り上げた。十年戦争の頃までは少しは残つたものもあつたのである。

監部を設けたが、他人を探偵し、他人の陰謀をあばき、自己の憎むものは善事までも抹殺するというのは危険で、大いに害があるとして、三条実美・岩倉具視とも相談して人心の動きを見るだけにとどめたというのです。しかし、それでもやはり困難だということで、明治九年頃には切り上げた、西南戦争の頃までは少し残ったが大体切り上げたと回想しています。

実際にも、監部は一八七五年（明治八年）四月に廃止されました。内史分局という内部部局がその機能や役目を引き継ぎましたが、これも翌年（明治九年）四月に廃止されました。ですから、ほぼ大隈さんの回想どおりです。なお、先ほど触れたように、一八七四年六月には、異宗徒掛誅者も廃止されています。

では、監部関係のスタッフはどうなったのか。これは、よく分からないのですが、先ほど触れた安藤劉太郎は、一八七三年、一足早く東本願寺の法主一行に随行して洋行しています。英語ができるからでしょうか。宣教師のもとに入り込んで、翻訳や通訳をやっていたわけですから。関信三と名前を改めてヨーロッパに向い、フランスからイギリスに渡ったことが、一行の記録などからわかります。

さて、その後、彼が日本に帰ってきて何をやったかということですが、これは大隈さんとは関係がありませんが、なかなか興味深いのです。帰国した後の一八七五年（明治八年）に東京女子師範学校、お茶の水女子大学の前身ですが、そこで幼稚園の開設に従事しています。この関信三こと安藤劉太郎は、幼稚園教育のパイオニアとして注目されてきた人物です。墓は谷中のお寺にあります。積み木を重ねたような墓になっています。

それから、これも大隈さんとは直接には関係ありませんが、大隈さんの情報係といってもよい二人、大伴千秋と莊村省三はどうなったのでしょうか。『官員録』を見てみますと、正院監部が廃止された後、大伴は正院十等出仕として政府内にとどまっています。その後は、こともあろうに大蔵省御用掛判任心得として、ずっと大蔵省に抱えられて、

一八八一年まで雇用されているようです。

それから、莊村省三。彼はもとは三条実美に抱えられた偵員だったのですが、一八七五年一〇月、正院分局の諜者となり、一八七六年二月に免職になっています。そのときの文書が残っていて、つぎのように説明されています。この省三は、先年来、偵員として「勉強苦慮」してきたため、正院の間諜であるということを知る者が多く、差し支えるのでやめさせたい。しかし、頑張ってきたからちゃんとケアしなければいけないということで、金五〇円を支給したいということです。

こうして一八七六年（明治九年）二月に莊村は免職になったのですが、翌一八七七年一月二九日付で大隈さんに宛てた莊村の手紙が残っています。去年三月の免職後も一生懸命やってきたが、あちこち走り回るためにお金が必要なので、何とかしてほしいということ、お金を無心しているのです。このためかどうか分かりませんが、莊村も一八七八年から大蔵省御用掛判任心得ということで、大伴とともに大蔵省に抱えられていたことが、『官員録』から判明します。

実際のところ、莊村はその後、大隈さんのもとにさまざまな報告書を送っています。監部廃止後の「大隈文書」にあるさまざまな探索文書がそれにあたります。このような形で、おそらく莊村は大隈さんのもとでさまざまな情報を収集していたらしいのです。

一八八一年の「明治十四年の政変」あたりまでは、大伴も莊村も確認できますが、以後は『官員録』から消えています。多分、大隈さんが下野したのとほぼ一致して、彼らも政府を去ったものと考えられます。

(2) 大隈情報人脈のその後

さて、最後に大隈さんの情報人脈のその後について少し探ってみたいと思います。私は大隈祭で「明治十四年の政変」についてお話しした際、大隈さんに宛てた北畠治房の手紙を使いました。大隈さんは、「明治十四年の政変」の直前まで、天皇巡幸に随行して東北・北海道方面に出かけていましたが、その途中の大隈さんに、北畠は東京の状況を手紙で伝えていきます。この手紙を見てみると、情報を収集した結果、それを踏まえて政府内部の様子を大隈さんに伝えていることが分かります。薩人が大いに団結し、閣下を攻撃しようとする様子がある、長人も加担して、今は閣下が孤立の様子だと述べているのです。おそらく北畠は、政府内部の情報を収集して、大隈さんに連絡したのではないかと考えられます。

さて、この北畠という人は、その後どうしたのでしょうか。実は、「明治十四年の政変」で大隈さんとともに政府を去っているのです。そして、立憲改進黨の結成に参加しています。つまり、大隈さんの腹心、重要なパートナーということで、以後、生涯を大隈さんとともに歩むこととなります。これについて、『大隈侯昔日譚』を編集した松枝保二は、「老侯生前最も親しき一人にて改進黨創設には挙^{こぞ}つて力あり。芝公園の老侯銅像建立委員長として非常に奔走尽力した人」と、同書で注記しています。芝公園に大隈銅像が建立された際には、北畠がその責任者となっています。こうして、大隈さんと北畠との関係は、明治初期の五代人脈から始まって、生涯ずっと続いていたといえます。

大隈さんは北畠について、五代の紹介で会ったが、「遂に無二の親友となつた」と『大隈侯昔日譚』で回想しています。他方、大伴千秋は職を失ってしまったものだから、「なんとかしてくれ」ということで、大隈さん宛の北畠の手紙のなかに出できます。大隈さんが免職になった翌年、一八八二年二月の手紙ですが、この間、大伴千秋がやってきて言うことには、在野で籠城しても、兵糧がないとやっていけないので、なんとか職を斡旋してほしいと求めています。

るわけです。大隈さんの一声がなければなかなか厳しいとして、お願いしますと依頼しているのです。その結果かどうか、大伴は愛知県一宮の真清田神社ますみだの宮司になっています。私は真清田神社に問い合わせて、大伴が宮司だったということを確認しました。

莊村省三については、よく分かりません。しかし、生涯読書ばかり楽しみにして、亡くなったということです。墓は熊本にあつて、これも確認しましたが、なかなか波乱の人生だったことが分かります。

おわりに

変動する明治初年の政情のなか、新政府はキリスト教の動向や、社会の不平・不満を把握するため、多くの密偵を各地に派遣して、さかんに情報活動を展開していました。大隈さんはその元締めだったらしく、「大隈文書」のなかには多くの密偵史料が残されています。

そこで、参議大隈重信がどのような方法で情報を収集していたのか、その情報網を人脈や密偵報告書から探ってみました。しかし、集めた情報を大隈さんがどのように分析・評価し、行動に移したのかは、残念ながら不明です。また、それらの情報が大隈さんにとって、どの程度、役に立ったのかもよくわかりません。いずれも、今後に残された研究課題です。

以上、政治家にとって情報が非常に重要な意味をもつということ、明治初期の大隈さんの情報網についてお話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。